

1 色の歴史 - なぜ黄色と緑色か

色にも歴史がある、歴史家はなぜ色について語らないのかと、フランスの紋章学者ミシェル・パストゥロー氏は20年以上も前から問題提議をしてきた。色の世界では染料や染色に関する技術の側面と、価値体系や象徴性といった観念の側面とが複雑にからみあっており、歴史家はいずれもなおざりにしてはならないのだが、色の歴史をつくるのは常に後者であって、特に中世の人間にとっては観念の領域が拘束力をもっていると氏は主張する。そして衣服は、そのような色の世界を観察するのに恰好の場を提供するにもかかわらず、なぜ服飾史家は色について語らないのかとわれわれを鼓舞してきた。結局、服飾史家よりも早く氏は服飾の領域も視野に入れて、中世を中心としたヨーロッパの色彩観念を語ることになった。1991年に刊行した縞模様に関する論考はあまりにも有名である。また古代ローマ以来価値の低かった青色が12・13世紀にマリア信仰と結びついて価値を上昇させた〈青の革命〉を論じ、近年では中世末期の宮廷で流行する黒色が、やがてピューリタンの倫理感に支えられて現代にまで至る経緯を解き、中世の色彩観念を長い歴史のなかに見事に位置付けている¹⁾。そのようなパストゥロー氏の調査を出発点として、ここでは黄色と緑色のシンボリズムを服飾の領域で考えてみることにする。

パストゥロー氏は黄色と緑色が中世の紋章の世界で特異な性格をもっていることを早くに指摘している²⁾。現実に使われた紋章の色の統計的分析によれば緑色は使用頻度が極めて小さいのだが、にもかかわらず文学作品などの虚構の世界に入ると俄にシンボリックな意味を強めるという。つまり緑色はイスラム教徒と悪魔の色であり、この色の紋章は必ず無秩序・混乱・騒動といった観念と結び付くという。しかもこの色に黄色（紋章用語では金色）が組み合わせられるとイメージはいつそう悪くなる。この組み合わせは狂気を表わし、そこで道化（道化 *fou* は狂人という意味である）の、いわばユニフォームの色となる。ところで黄色については、ユダヤ人をキリスト教徒から区別するために彼らにこの色のしるしを付けさせたという、よく知られた事実がある³⁾。つまり中世ヨーロッパのキリスト教徒の目には、黄色は敵視するユダヤ人に密接に結び付く色でもあった。パストゥロー氏らがこのように言う黄色と緑色のイメージは、では日常生活の服装の世界ではどのようなものであつただろうか。結論をいえば、同じ価値体系のなかにあり、黄色と緑色の衣服は使用の場が限られていた⁴⁾。

中世の人々の衣生活を知るには、王侯貴族の会計記録、あるいは農民に至るまで作成された死後財産目録、商人の仕入れ帳簿など少なからぬ文書資料がある。このような記録のなかで衣類は色名で示され、区別されることが多かった。使用される布地の大部分が毛織物で、その毛織物は無地であったから、織物の種類は色によって区別するのが手っ取り早かったからである。そのような色名を見ていくとき、赤と青の範疇の色の語彙の豊かさに比して、黄と緑の語彙が貧弱であることはすぐに気が付く。つまり赤系と青系の衣服がもっとも好まれて着られたのに対し、明らかに緑と黄は使われにくい色なのである。緑を表わすことばは *vert* のみ、これに明るいとか暗いとかの形容詞が付き、緑色のニュアンスにもヴァリエーションがあつたらしいことは分かるが、色名としては一つである。一方の黄色

についても、もっとも普通に使う *jaune*、それに黄褐色を表わすタンニン色 *tanné*、この二つのことばしかない。黄と緑の色名が乏しく、使用頻度が小さいことは、一方で文学作品の服飾描写においても同様である。しかもパストゥロー氏が紋章について述べたように、服飾の世界でも文学が記す黄色と緑色は極めて強い象徴性を担っているようにみえる。以下、黄色と緑色の衣服について会計記録や写本挿絵などから使用の実態を、またそれらの意味を文学や図像の表現から明らかにしてみよう。なお参照する会計記録はドゥエ・ダルクの校訂によりフランス歴史協会叢書二巻に収められた14世紀のフランス王室の記録である⁵⁾。衣類調達の記載を十分に含んだ記録が集められており、14世紀の王侯貴族の衣生活はとりあえずこれに代表させてもよい。

II 黄色と緑色の衣服は誰がいつ着るのか？

会計記録のなかに黄色 *jaune* の布地についての言及が現われるのは、ほぼ道化服としてである。黄色の布の記載から遠からぬところに、やはり道化のためとして緑色の布の記載があるのは、これら二色が組み合わせられたことを示している。そしてこの二色は、衣服の前中央で左右に色分けしたいいわゆるミ・パルティのデザインであったことは、写本挿絵などの道化の図から確かである。図1は聖書の詩篇53篇冒頭の飾り文字に描かれた道化の姿(右の人物)である。「愚かな者は心のうちに、神はないと言う」のテキストにしたがって、ここには狂人または道化を描く習慣がある。道化は右半身の上着から頭巾にかけて緑が使われている以外は明るい黄色で塗られている。図2はイタリアのフェラーラの宮廷に仕えた道化ゴネルラの肖像である。上に羽織っている袖無しの服の前面には、褐色がかった黄色の帯状の布に緑と赤の布が加えられて、縦縞が構成されている。色と柄の選択にヴァリエーションはあるものの、黄と緑の配色が道化服の主流をなしていることは間違いない。

ゴネルラの衣服を構成する黄褐色の色は、タンニン色と呼んでよいものだろうか。タンニン色は15世紀半ばともなれば衣服の色として少なからず記載され、またフランス王シャルル8世の紋章の色の一つともなるが⁶⁾、14世紀の記録には稀で、ドゥエ・ダルク校訂の二巻本には記載は次の一箇所だけである。それは1316-17年の記録にフィリップ長身王の妃による贈与として記された「妃の洗濯女と牛の世話係の女のために13オーヌのタンニン色の布」という記載である⁷⁾。タンニン色の布はこの種の階級の奉公人には珍しくはなかったのかもしれないが、記録のなかでは稀である。図3はサヴォア地方のサン・ジャン・ド・モリエヌ大聖堂に残っているステンドグラスである。全体に黄色が使われ、熊を踊らせている芸人だけに黄色が使われているわけではないが、芸人の身体に横縞が描かれているのは、明らかにこの種の人々への蔑視感が働いているためで、黄という色が選ばれたことにも意味があるだろう。パストゥロー氏が述べたように、縞は中世に疎まれた模様である。

黄褐色を含めて黄色は道化や奉公人や芸人にふさわしい色であったということだが、このような黄色が王族身分でも子どものためなら採用されることがある。14世紀の記録のなかで黄色を着る三番目の人物は10歳に満たない幼い王女たちである。1316年に即位したフィリップ長身王には、8歳の長女ジャンヌを頭に4人の娘と1人の息子がいた。即位式に臨んで子どもたちには晴れ着が準備されたが、長女ジャンヌと4歳の三女イザベルには黄色のビロードで3着から成るひと揃いの衣裳が仕立てられた⁸⁾。14世紀の記録のなかで黄色の服を着ているのは、以上に述べた道化と奉公人と子どもだけである。しかるべき身分の大人には決して現われることのない黄色の服が子どもには許されるということ

は、子どもに対する中世の人々の意識を考えさせる。幼い子どもは、道化や芸人といった人物に近い存在なのだろうか。

道化と子どもの衣服の類似は緑色の使い方においても同様である。以下に述べる通り緑色もまた(黄色ほどではないにしろ)使用の場が限られているが、道化服と子ども服にはこの色が集中して現われる。道化服の黄色に組み合わせられる色は多く緑色であることは既に述べた通りである。そして前述の王女たちには次の通り緑の服がさかんにつくられている。1316年のクリスマスには4人の王女と1人の王子の全員に、緑の毛織物で3・4着から成るひと揃いの衣裳が新調されている。5月には婚礼に列席するためとして3人の王女に緑の絹地の衣裳が、6月には緑のタフタで一種の外套(シャブ)が王女らに、あるいは三女イザベルにはウィーン旅行に際し緑のピロードの衣裳が新調されている⁹⁾。

緑色が子どもの色としてふさわしかったことは、バルトロメウス・アングリクスの『事物の属性の書』の写本挿絵を調べたアレクサンドル・ビドン氏によっても報告されている¹⁰⁾。一種の百科全書ともいえる13世紀のこの著作には人生の世代区分を述べたところがあり、著作は15世紀まで挿絵付きで筆写され続けた。世代を描き分けたそれらの挿絵には、幼年期や少年期の子どもが緑の服を着ている例が多い。たとえば図4では、中央の小さな子どもが緑色を着ており、図5では父親に叱られている男の子が黄緑色を、右端の青年も緑色を着ている。緑色はこのように青年の服にも見られるが、壮年期や老年期の男にこの色が出てくることは決してない。図6は後の《人生の諸段階》のテーマを思わせる図であるが、向かって左側に男が、右側に女が上から下に年齢順に並べられている。左側で風車を持った男の子と、右側で金髪を垂らした様子から少女らしい人物とが緑色を着ている。

14世紀の記録に戻ろう。緑の服は道化と子どものほかに次の二つの特徴的な使い方がある。その一つは狩猟衣としての使い方である。ガストン・フェビュスの『狩りの書』(1387-91年)には「夏の鹿狩りには緑を、冬の猪狩りには灰色を着るべし」とあり、同書の挿絵には緑を着ている人物が多い(図7)。緑の木々に紛れるというカムフラージュの目的があったためで、近代にいたるまで狩猟の習慣として続くことになる。そしてもう一つの使い方が、今日のメーデーの古いかたちである5月1日の祭日に宮廷こぞって緑の服を着るといふ、とくに14世紀末シャルル6世の宮廷に顕著な習慣である。1386-87年の記録によればシャルル6世は大量に緑の服をあつらえ、貴族らに配っている¹¹⁾。図8はシャルル6世の叔父にあたるベリー公が作らせた時禱書の5月の暦図である。馬上の3人の女性が緑を着ているのは明らかに五月祭のためで、頭に枝葉を飾っている通り、背景の森のなかで若い芽の枝を摘んで戻ってきたところで、祝祭のひとこまである。

緑の服の記載は以上に述べた以外にまったくないわけではないが、ほぼ上の例に限られるといつてよい。緑色は道化と子どもが着る色で、しかるべき身分の大人が着るとするなら狩猟と五月祭のときだけである。

III 黄色と緑色のシンボル

着る人と着る場合とが限られた黄色と緑色、これらの色にはどんなイメージが凝縮されているといたらよいだろうか。まず緑の服について考えてみよう。五月祭をうたったウスターシュ・デシャン(1346-1407年)の抒情詩には、緑の服に恋愛感情を重ねたものが多い¹²⁾。つまり緑は恋の色である。一方このような緑衣のシンボルを積極的に使ったギヨーム・ド・マショーの『真実の書』(1363-64年)

のような作品もある。主人公が想う女性に初めて会ったとき、彼女は青地に緑の鸚鵡を散らした服を着ていた。緑は彼女の恋心を、青はその心が誠実なことを表わすと、作者はあえて色の意味を解いている¹³⁾。このような色のシンボル解釈はギヨーム・ド・マシヨの趣向というのではなく、中世の人々の一般的な傾向であった。やがて15世紀の半ばに色の意味をあれこれ綴った『色彩の紋章』が著わされ、ヨーロッパの広くに流布するのはそのためである。緑が5月の色であり、恋の色であるという解釈はもちろんこの著作のなかでも同じであるが、さらに結婚したばかりの男女の色であり、若者の陽気を表わし、子どもの若さを表わすと述べられている¹⁴⁾。図9はアルノルフィーニ夫妻を描いたヤン・ヴァン・エイクの作品で、二人の結婚を表わしているとも、あるいは婚約の儀式を示すとも言われているが¹⁵⁾、いずれにしろ夫人の緑の服はそのための表現の一部を担っているのではないか。一方、図10は胸に蛇をぶらさげた、ロマネスク様式の典型的な〈淫乱〉の像である。サン・タヴァン教会に残るこの人物の周囲にはさらに30人の姿があるが、衣が緑色で塗られているのはこの人物だけ、おそらく恋を表わす緑のイメージが考慮されたに違いない。

色は常に両義的である。同じ緑が若者の恋の歎びを表わすと同時に、淫乱として断罪される悪しき恋をも示すというのもその一例である。上述のギヨーム・ド・マシヨの物語では、女性の心変わりを疑った主人公が夢のなかで全身緑色の彼女の後姿を見るという挿話がある。緑は一方で失恋の色にもなる。緑は春に蘇る自然の色であり、したがって「新奇」を表わし、移ろい易さのシンボルでもあるからである。あるいはまた若さゆえの未熟、さらに押し進めれば理性の欠如を表わす。そして緑色のこのような意味は、狂気を表わす黄色の意味に限りなく近づいていく。『色彩の紋章』は、子どもが黄色を着れば「軽い狂気」を表わすと述べている。若さと、それゆえの欠点を暗示するのが黄色と緑色で、これが子ども服の色の意味ということになるのか。

現実の生活を反映しているのか、文学のなかに黄色の服を着た登場人物は極めて稀で、筆者はこれまで一人しか出会っていない。その人物は、13世紀の宮廷風騎士道物語『ギロン・ル・クルトワ』に、もっぱら「黄色い絹の婦人」というあだ名で登場する女性である¹⁶⁾。黄色の服の意味は説明されていないが、お人好しの若い騎士を手玉にとりたかな女であるから、黄色の選択はそのような性格と無縁ではない。一方、ことばの喩えとしては黄色ということばは少なからず現われる。「蠟のように黄色くなる」は、病み衰え、悲嘆に暮れ、不安にさいなまれ、やつれた人の顔色を表現する常套句である¹⁷⁾。あるいは艶のある黄褐色の獣の毛の色を示す *fauve* ということばは、裏切りとか欺瞞とかの意味をもつ。裏切り者には「あいつは黄褐色だ」というのだが、それを図像化したのが図11である。ユダはイエスの弟子の一人だが、銀貨と交換にイエスをユダヤ人に引き渡そうとする。イエスに接吻をし、ユダヤ兵に合図をおくっている裏切り者のユダの衣は黄褐色に塗られるのが習慣である。図12でイエスを捕えたユダヤ人の姿に、鮮やかな黄色のタイツや頭巾が目立っているのはやはりこの色のイメージが考慮されているからだろう。ルネ王の著わした『愛に囚われし心の書』(1457年)には〈怒り〉を表わす擬人化人物が、あざみの花と茨の枝をタンニン色の背景に表わした紋章をもっている¹⁸⁾。つまりタンニン色は怒りのシンボルである。

IV おわりに

道化服と子ども服のあいだには、黄色と緑色の使用の他にもう一つの共通点がある。それは道化服

の特徴として上述した、左右色違いのミ・パルティのデザインが、実は子ども服の特徴でもあるということである。ミ・パルティは道化や楽師や芸人のユニフォームで、要するにこれもまた黄色と同じように卑しられた人々のしるしである。子ども服にこの種の人々の衣服と共通するところが多いということは、中世の人々の意識のなかで子どもはそのような人々の範疇に入ったということである。衣服の調査はこのようにして、中世の人々の子ども観を考える上で意味をもつ。フィリップ・アリエスが『子どもの誕生』のなかで、中世には子ども独自の服装はなかったとした主張は今日ではほとんど否定されている。上に引用したアレクサンドル・ビドン氏は、幼年期・少年期の子どもたちに年齢による微妙な着分けが存在したこと明らかにしている¹⁹⁾。本論に述べたこともまた、大人の服とは明らかに異なった子ども服の存在を示している。

註

- 1) パストゥロー氏の主な著作は次の通り。Michel Pastoureau, *L'Hermine et le sinople, Léopard d' or, Paris, 1982; Figures et couleurs*, Léopard d'or, Paris, 1986; *Jésus chez le teinturiers —Couleurs et teintures dans l'Occident médiéval*, Le Léopard d'or, Paris, 1997. 邦訳には次がある。『悪魔の布 —縞模様の歴史—』松村剛・恵理訳 白水社 1993年;『ヨーロッパの色彩』石井直志・野崎三郎訳 パピルス 1995年;『青から黒へ —中世末期の色彩倫理と染色—』『中世衣生活誌 一日常風景から想像世界まで—』(徳井淑子編訳 勁草書房 2000年) 所収。
- 2) Michel Pastoureau, *Vogue et perception des couleurs dans l'Occident médiéval: le témoignage des armoiries, Etudes sur la sensibilité au Moyen Age*, Paris, 1979; *Formes et couleurs du désordre —le jaune avec le vert, Médiévales*, no.4, 1983
- 3) 阿部謹也「黄色いマーク —ユダヤ人差別のシンボル—」『色』ポラ文化研究所 1988年
- 4) 以下、本論は概ね拙著『服飾の中世』(勁草書房 1995年) 第一部に依る。
- 5) L. Douët-D'Arcq, *Comptes de l'argenterie des rois de France au XIVe siècle*, Paris, 1851; *Nouveau recueil de comptes de l'argenterie...*, Paris, 1874
- 6) 拙論「フィリップ善良公の"涙の文様の黒い帽子" —中世末期のモード・文学・感性—」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第50巻 1997年
- 7) *Comptes de l'argenterie des rois*, p.37: «pour 13 aunes de tennée, (...) pour la lavendière la Royné et pour la vachière, ... »
- 8) *Comptes de l'argenterie des rois*, p.31. たとえば«Pour Madame Jehanne, ainsnée fille le Roy, (...) pour le sacre, une robe de veluiau jaune de 3 garnemenz. »
- 9) *Nouveau recueil de comptes de l'argenterie...*, pp.1-19
- 10) ダニエル・アレクサドル・ビドン「巻き紐から衣服へ —中世の子ども服(13-15世紀)—」前掲『中世衣生活誌』所収。
- 11) *Nouveau recueil de comptes de l'argenterie...*, p.197. たとえば «... xxvj houppebandes de drap vert, faictes et ordonée par le Roy nostre sire, et pour xxv autres seigneurs pour le premier jour de May: »
- 12) *Œuvres complètes d'Eustache Deschamps*, éd. Queux de Saint-Hilaire & G. Raynaud, Paris, 1878-1903. Cf. Ballade, ccccxix, «Cilz premiers jour de May doit estre armez: Vestus de vert, amoureux, le querons... »
- 13) Guillaume de machaut, *Livre du voir-dit*, La société des Bibliophiles français, Paris, 1875, p.82sq.
- 14) Sicille, *Blason des couleurs*, éd. H. Cocheris, Paris, 1860, pp110, 116
- 15) E. Hall, *The Arnolfini betrothal*, University of California Press, Berkeley/Los angeles, 1994

16) R. Lathuillère, *Guiron le Courtois*, Droz, Paris, 1966, ch.82

17) たとえばギヨーム・ド・ロリス『薔薇物語』の〈悲哀〉の描写を参照。「...〈悲哀〉が壁のうえに描かれていた。顔色を見るとたいへんな心痛を抱え込んでいるのがよくわかる。それに黄疸にかかっているようだった。...心痛や悲嘆や懸念や不安に日夜苦しみ、そのため顔色が黄色くなって痩せて蒼ざめているのである。」(篠田勝英訳 平凡社 1996年)

18) René d'Anjou, *Le livre du cuer d'amours espris*, éd. S. Wharton, Union générale d'édition, Paris, 1980, p.61 :

«Courroux, le seigneur du chastel, armé d'unes armes de couleur de tanné et avoit sur son escu trois plantes de chardons picquans a une branche d'espine noire au travers, ... »

19) 註(10)を参照。

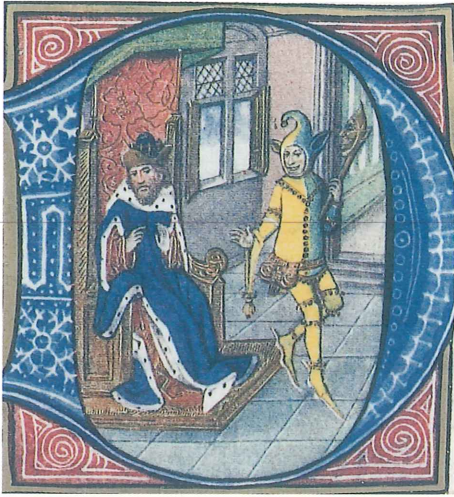


図1 『詩編集』ブリュッセル王立
図書館Ms.9026 15世紀



図2 ジャン・フーケ
『道化ゴネルラ』
ウィーン
歴史美術館
15世紀



図3 サン・ジャン・ド・モリエヌ
洗礼者ヨハネ大聖堂
ステンドグラス 1498年



図4
バルトロメウス・
アングリクス『事
物の属性の書』フ
ランス国立図書館
Ms.fr.9140
15世紀

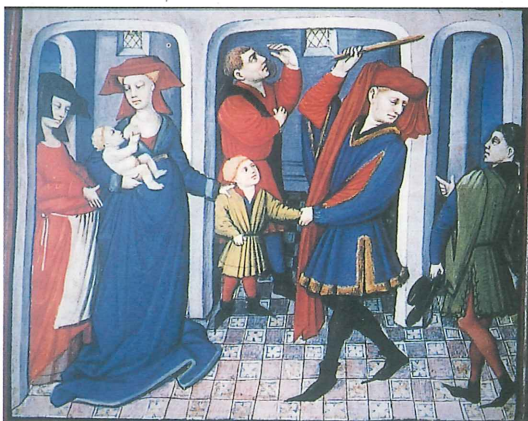


図5 バルトロメウス・アングリクス
『事物の属性の書』フランス
国立図書館 Ms.fr.135 15世紀

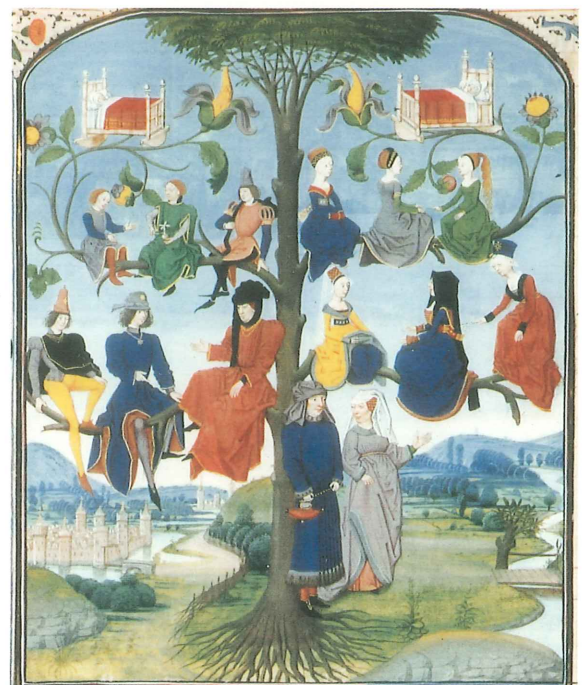


図6 ジャン・ブーティエ『田舎大全』
フランス国立図書館
Ms.fr.202 15世紀

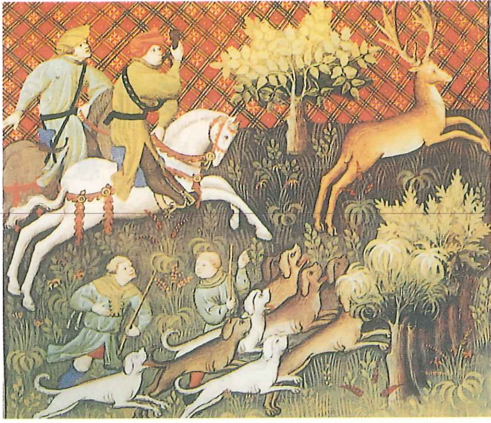


図7 ガストン・フェビュス『狩りの書』
フランス国立図書館 Ms.fr.619 1407年頃



図8 『ベリー公のいとも豪華な時禱書』
五月の暦図
シャンティイ コンデ美術館 1410年頃

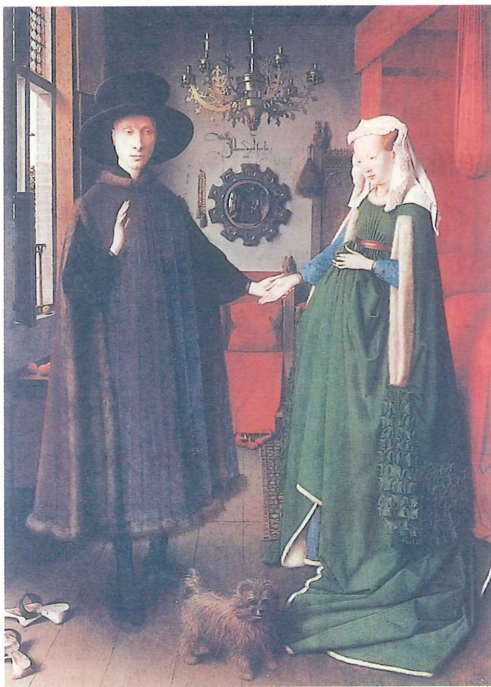


図9 ヤン・ヴァン・エイク
《アルノルフィーニ夫妻》
ロンドン ナショナル・
ギャラリー 1434年



図10 サン・タヴァン
教会の壁画
〈淫乱〉の像
12世紀



図11 『ベリー公の小時禱書』
フランス国立図書館 Ms.1st.18014
14世紀

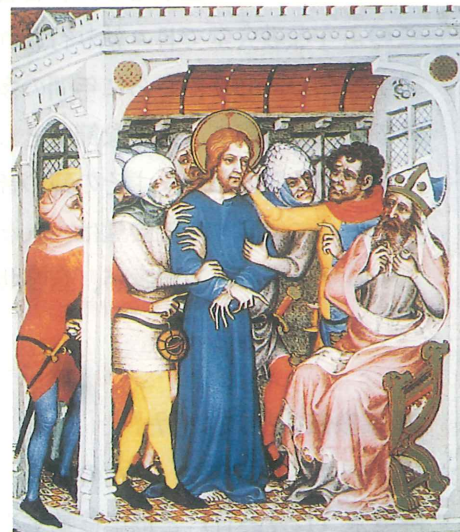


図12 『ベリー公のいとも美しき聖母時禱書』
フランス国立図書館 Ms.n.a.1st.3093, 1380年頃